剃刀

中村吉藏

登場人物

木村爲吉　理髪師
お　鹿　内縁の妻
佐藤敬一　小學校校長
野口早太　村役場書記
岡田秀作　代議士、參事官
勘　七　富豪伊勢屋の息子

場所　東京附近の小村驛

時　現代

舞臺は片田舍の理髮店の内部、上手三分は疊を敷いて茶の間全帶が、來客の待合處になつてゐる、古びた長火鉢を据ゑ、粗末な茶器などがそこ等に轉がつてゐる、突當りは劃の障子が二枚、その左手に紗擬ひの簾が裏座敷への出入口に懸けてある、右手の壁には暦入の彩色のけばけばしい廣告繪や、石版刷の戰爭畫などがベタベタ貼附けてある、理髮床の正面上手寄りには、出入口の玻璃戸が二枚、それから下手へ寄つて、緣の剝げた姿見鏡が二つ、棚の上にはブラッシ、香水瓶、剃刀掛、シャボン函、檜扇の花の赤いのが小鏡に映つてゐる。花瓶などゴタゴタと列び、下手の壁際には洗面臺が立つてゐる、椅子も三臺、小汚いのが配置されて、何んだか荒んだやうな、塵埃臭い空氣がそこらに漂うてゐる。

白い仕事着を被つた爲吉は、神經質らしい眼を光らせながら、一人の男の顏を剃つてゐる、火鉢際には二十七八の蝶々髷の髮が亂れて青白い顏をした、眼元に愛嬌のある、お鹿が長煙管で煙草を吹かしてゐる、二十四五の棘栗頭の、ニッケル緣の眼鏡を掛け、小倉の袴を着

けた村役場の書記野口早太は、上り框(あがかまち)に腰を卸(おろ)して新聞を覗き覗き話してゐる。

野口　今日は午後から淨福寺で政談演說があつて、それから夜にかけて懇親會があるんだ、何しろ代議士で今度の内閣で參事官に任命されたんだし、新聞にもこんなに書立ててある位だから、此の邊の評判は大したものだ、幸(さいはひ)、日曜日でもあるしするから近村からも隨分有志者が集つて來るだらう、岡田さんのやうな人物が出たのは此の村の名譽だね。

お鹿　まだ若い方なんでせう、夫(うち)と同年配位なもんでせうねえ。

野口　何んでも三十代だらう、四十になつたら縣知事か局長、五十になつたら大臣だらうね。

お鹿　へエ、そんなに豪(えら)い人ですかねえ、何んな顏をしてる方でせう、一寸見たいわ。

野口　（笑つて）別に俳優のやうな顏をした色男でもないサ、だが眉の太い、口元の引締つた、一寸見ても貫目のある人だね、殊に眼の光の鋭さと云つたら、一目で他人のお腹の中まで見破らうといふやうな處があるよ。

爲吉　（冷やかに笑つて）千里眼つてふ奴の親類見たいだな。

野口　イヤ戯談(じやうだん)ぢやアない、昨日、村役場へ訪(み)えて村稅の事なんかいろいろ聽いて行かれたが、後で村長も收入役も、「あの眼が恐い、一物(いちもつ)ある」つて云ひ合つてたんだ、それに第一、氣輕に村役場へテクテク歩いて來るなんて、平民主義の人だつて、皆も感心してゐたんだよ。

爲吉　平民主義か……勝手な時には然(さ)うなんだらう。

お鹿　宅ぢやア昨日、ワザワザ御機嫌伺ひに行つたのに來客があるつて、面(つら)も出さないのは不都合だつて、ブリブリ怒つてるんですよ、けれども身分が違やア仕方がないぢやアありませんかねえ。

野口　そりや然うサ、己(おれ)だつて、顔は見たが、まだ口を利いた事はないんだからな。

爲吉　（ブラシを掛けながら）村のお役人様と、政府のお役人とは、そりや資格が違はアな、けれども己と秀作さんとは、そんな筈はねえんだ。

お鹿　村の小學校で、同じ級だつたし、卒業する時も宅のが一番で、あの方が二番だつたからつて、今でも矢張昔の友達の様な事を云つてるんですが、世間は然うは行きませんわ、あんまりそんな事を人様に云つちやア笑はれるつて、私が氣を揉んでるんですよ。

爲吉　フン、何方(どつち)が笑はれるんだい？

野口　昔は昔、今は今サ、村役場の書記と政府の參事官と資格が違つてりやア、田舍のざんぱつ屋さんと、高等官二等とは尚更縁もゆかりも無さそうだ、爲吉君の變人も、ちと桁(けた)が外(はづ)れ過ぎてるやうだよ、氣候の加減かも知れないな。（と新聞を取り上げる）

お鹿　眞實(ほんたう)ですよ、この頃は妙に氣六づかしくなつて、昨日なんか記事の出てゐる新聞をベリベリ引裂いたりなんかするんですもの、宛(まる)で氣狂ひだつて笑つたんですよ。

爲吉　貴樣こそ、餘計なお喋舌(しやべり)をするな。（叱り付けて、ヂツト睨み、それから客を洗面臺の處へ連れて行く）

野口　今日の新聞は二段埋めてあるな、「錦を故郷に飾れる岡田參事官」つて、二號標題だから豪いよ……何しろ、善かれ惡かれ、人間も新聞に出されるやうにならないと駄目だな、生きてるか、死んでるか分らないやうな事をして、愚圖愚圖、その日暮らしをやつてるんぢやア全く生甲斐がない。

お鹿　（苦笑して）私だつて、これで新聞に載つた事もあるんですがねえ。

野口　然う、然う、例の無理心中の一件かね……お鹿さんも兎に角あの頃は若かつたよ。

お鹿　今はもうこんな婆さんになつちまつたわねえ。

野口　イヤ、然ういふ譯ぢやないよ……今でも矢張り美しいには美しいがね、（少し周章てながら）あの相手は監獄に入つたんだつたね、でもまあ、お鹿さんが負傷しなかつたのが何より幸福だつたよ。

お鹿　お庇で生き延びて、今ぢやアざんぱつ屋のお女房さんかね、斯うなつちや新聞へも出ないわねえ。

野口　イヤ、我々が新聞へ出るのは碌な事ぢやないよ、まア、出ない方が增しとして置くんだな。

（爲吉は伊勢屋の息子勘七の散髮を了へて、上り框へ腰を卸ろし、煙草を一服する。客は大島の單衣に鼠色の縮緬の帶をしめ直し、巻煙草を吹かし始める。）

お鹿　若旦那、まアお掛けなさいませな。

勘七　有難う。（腰を卸ろす）

野口　伊勢屋さん、まア遊んでお在なさい、今に這般の將棋の仇打ちをやりますよ、ちよつと一つ、頭髪を濟まして貰つてからね。（早く椅子へ倚る）

勘七　（お鹿の顔と爲吉の顔とを等分に見ながら）お忙しいでせう⁉

お鹿　イエ、別に貴方……まアお上んなさいましな、お茶を一つ入れませう、番茶ですけれども。

勘七　お構ひなさらんで下さいよ。

お鹿　何んにも貴方……まア此方へお上んなすつたら善いぢやアありませんか。

勘七　（爲吉の方を氣にしながら）お邪魔ぢやありませんか？　（云ひ云ひ片足づつ膝行り上る）

お鹿　此頃は、奥さんの御病氣はおよろしい方ですか？

勘七　否え、病氣保養に里へ遣つてあります、あんなものはもう歸つて來ないが宜いんです、病人を抱へ込んぢやア一生のお荷物ですからねえ。

お鹿　でも可哀さうぢやありませんか？

勘七　仕方がありませんよ。

野口　（笑つて）勘七さんが自分の病氣を傳染して置いて、それを打捨るなんて随分ぢやアないか？　かういふ人の細君になつたものは随分悲慘だよ。

お鹿　眞實ね、一體、男子つていふものが得手勝手なんだわ、若旦那に限つた事ぢやない。

野口　此處の親方なんか、女房孝行つて評判だが、でも、矢つ張お鹿さんの方には怨があるんだね。

お鹿　ありますともさ……。

（爲吉は默つて勘七の方をジロリジロリ尻目にかけてゐる。）

野口　時に親方、煙草が濟んだら、チヨツト遣つて貰はうぢやないか？　午後からお寺の方へ行つて、會場の整理を見屆けて來なけりやアならんから、これでナカナカ忙しいんだ。

爲吉　でも將棋の仇打だなんて、呑氣（のんき）さうな事を云つてたぢやアないかね？　まアもう二三服遣ってからだ、己だつて元來人の頭髪（あたま）を刈る爲に生れて來た人間ぢやアないんだからな。

野口　だつて商賣となりやア、そんな變痴奇論（へんちきろん）は止す事だよ、ざんぱつ屋で飯を食つてる以上、お客様の云ふ事を聽くのが當然だ。

爲吉　八錢のお客様のお庇（かげ）で、飯を食はせて貰つてるんだな、難有（ありがた）い事だ。

お鹿　汝（おまへ）さん、そんな馬鹿な事を云はないで、早くして上げたら宜いぢやアないかね、野口さん

だからこそそんな無遠慮な口を利いても判つてなさらうが、商賣に障るよ。

爲吉　己やもうつくづく忌（いや）になつた。寧（いつ）そ廢業したい位だ。

野口　親方、串談（じようだん）云つちやア困るぜ、此村には此處一軒ぢやないか？　廢業されちやア隣村迄行

かなけやアならない、皆が困るよ。

お鹿　この頃は急にあんな事許り云ひ出して來て、私も一人で困らせられてゐるんですよ……若旦那も些(ち)つと云つて聽かせてやつて下さいな。

勘七　兎に角、稼(かせ)がなけりや仕方がないでせう。（茶を呑み呑み云ふ）

爲吉　己等は稼がなけりやア仕方がなくて、若旦那は遊ばなけやア仕方がないんだらう、善く出來てゐますぜ。

お鹿　そんな事をツケツケ云ふもんぢやないよ……若旦那の家は澤山(たん)とお金がおありなさるから、稼ぐ方は店の者が大勢引受けてしてゐるんだし、若旦那は唯遊んで居なさればそれで濟んで行くんですわねえ、此方等(こちとら)とは運命(まはりあはせ)が違つてゐるんだからね。

爲吉　フン汝もその運命(まはりあはせ)が惡かつたんだね、お氣の毒さまだ。

お鹿　惡縁つていふんだらうね。（笑ふ）

爲吉　あの時汝も若旦那に請出(うけだ)されてゐたら、今ぢや伊勢屋の若奥樣で、ざんぱつ屋さんなんかとは口も利かない身分になれたんだらうが、馬鹿だつたね、尤(もつと)も越前屋(ゑちぜんや)の酌婦にや、今の身分が分相應だと思つて諦めるんだ。

お鹿　（勃(むつ)とした顔色）若旦那を前に置いて、下らん事をお云ひでないよ、馬鹿馬鹿しいッ。

爲吉　（鼻であしらつて）若旦那も昔忘れずに、よくチヨクチヨク來て下さるんだから、お禮を云つたが宜いんだ。

勘七　……もう失禮します……ぢやア、これを……。（ト銀貨を出す）

お鹿　難有う……二十錢でございますか？　お剩錢（つり）を！　（起上る）

勘七　いやお剩錢はよろしいんです。（と下へ降りる）

爲吉　お剩錢を持つてお出で……十二錢！

勘七　イヤ……それはもう要（い）りませんから……。

爲吉　要らん事はありません……餘計に貰ふ道理がないから。

（お鹿が渡すのを爲吉は受取つて、客の鼻先へ突出し。）

爲吉　難有う……。

（客は匆々（そうそう）に立出で、戸口の玻璃戸をガタリと軋（きし）らせて出て行く。）

野口　親方も随分ぶつきら棒だな。

爲吉　畜生めッ、（怒つた顔色で、後を睨めながら）まだ何んとか思つてやがるんだから仕末に了（をへ）ねえ。

お鹿　ああ一酷（いつこく）ぢやア段々お客が寄り附かなくなる一方だよ、大切な旦那様ぢやアないかえ。

爲吉　ヘン、貴様の爲めにや然うかも知れないが、己の爲めには油斷のならない畫鳶（ひるとんび）だ、ざんぱつ屋をだるま屋と間違へてやがるんだらう、生（なま）つ白い面（つら）をしやがつて、女の尻を追駈け廻る外に能がないんだから箸にも棒にも懸つたもんぢやアない、あんな穀潰（ごくつぶ）しでも、富豪（かねもち）の息子だといふので、村の奴らはへいへいしてやがる、笑はせやがらアな。

野口　（眞面目になつて）そりやア全く親方の云ふ通りだ、あんなのが不良少年つていふんだな……（四邊（あたり）を見廻して）大きな聲では云へないが……。

お鹿　（口元で笑つて）だつて野口さんも折々、若旦那のお取巻きで料理屋へ上つて行きなさるつて評判がありますよ。

野口　（周章（あわ）てたやうに）それは一度や二度お交際（つきあひ）に行つた事もあるが、幇間（たいこもち）のやうな眞似はしないよ、これでも大望のある身分だから。

お鹿　東京へ行つて勉強するつて云ふ貴方のお話も隨分長いやうですが、愈々（いよいよ）何時頃御出發なさるんですか？

野口　講義録の方はもう卒業したから、これで一二年勉強したら、辯護士か、高等文官の試驗は受けられますよ、一生、村役場の書記ぢやア情ないからね、何時でも上役に頭を抑へ付けられ通して、威張れる時と云つたら、まア滯納稅の處分に行つた時位のものだね。

お鹿　ホヽヽヽ然うでしたつけね、この春、此處へ滯納稅の取立に入らしつて茶碗や膳まで差押へるつて切口上で云ひなすつた時は、チヨツと怖うございましたつけ、平常（ふだん）の野口さんとは

人間(ひと)が變つてゐたやうでしたよ。

野口　（眞面目になつて）職務の執行となつたら、そりやア止むを得ないんです、ああいふ時は自分が自分でない、國家の法律の力が、自分の身體に宿つて來るんだね、それで、氣の毒だとか、慘酷だとか云ふ感は、何處か腹の隅の方へ押し込められて了ふんです、そして他人の柔脈(やはら)を押へたやうな氣がして、苦しむのを見てゐるのが、一寸愉快ですよ、後からは氣の毒になつて、閾(しきゐ)を跨(また)ぐのが極りが惡いけれども。（と頭を搔いてわざとらしく笑ふ）

爲吉　（冷やかに笑つて）柔脈(やはら)を抑へるつて云やア私は毎日それをやつてるんだね、柔脈つて云ふよりは私のは急所だ、私は毎日、剃刀(かみそり)を握つて、人の喉首を剃つてるんだからね、刄先を一つグイと突いたら人間の息の音(ね)を止めて了へるんだ、それを思ふと、お客つて皆馬鹿正直なもんだ、此方が何んな恐ろしい事を考へてるかも知らないで、平氣で、首を此方の手へ任せて、磨(と)ぎ澄(すま)した刄物で自由自在に生身(なまみ)へ觸(さは)らせるんだからね、何んな豪さうな顔をしてゐる人でも、何んな善い身分だと云つて威張つてる奴でも、此方の腕へ首を抱かせたら最後、もう活さうが殺さうが指先一本の働きにあるんだからね、それで私は無事に剃つてやつた後では人間一匹助けてやつたと思つて、腹の中では笑つてるんだ。

お鹿　まあ汝(おまへ)さん、そんな氣狂めいた事を云つたり、考へたりしちやアいけないぢやアないか？

……汝さん何うも變だよ、お醫者に診て貰つたらいいわ。

野口　親方は剃刀を使ふ時、そんな事を考へてるんかね、薄氣味が惡くなつて來るよ。

爲吉　イヤ、それも始めの中は、お客の顔へかすり傷一つ附けないやうにと思つて、後生大事にビクビクやつてゐたもんだが、段々馴れて來ると、段々倦怠が來て、終ひには繰り返し繰り返し一つ事を毎日やつてるのが癪に障つて、寧そ客の喉首でもぐいとやつたら、この商賣を廢業られるかと云ふ氣になつて、それからは始終、そんな考へが頭の中に巣を喰つたやうに附いて廻つてゐるんだ、現に、今の、伊勢屋の若僧を剃つてやる時も、グイと喉笛へ突込まうかと思つたんだ。

お鹿　オヤ、マア……眞實に此人は何うかしてるんだよ、野口さん、困りましたねえ。

野口　これぢやウツカリ髯も剃つて貰へない、ざんぱつ屋で死んだんでは、私も浮ばれない、これでまだナカナカ大望を持つてゐるんだから。（向うの椅子へ逃げる）

爲吉　（嘲るやうに笑つて）マサカ、村のお役人の喉笛を抉るやうな氣まぐれもやりませんよ、何しろ考へて見ると、自分の生命と掛替へだからね、あの伊勢屋の若僧位なものと取替へるのもつまらなくなつて來まさア、そりやア、若し彼奴が、家の嬶を何うかしたといふ事件でもあつた日にや、今日だつて、生かしてこの戸口を出しやしなかつたかも知れないけれども……。

野口　（吐息をして）ぢやア怨みがなければ、そんな眞似も出來ないといふんだね。

爲吉　イヤ、怨みがあれば、それ位な事は當り前だアね、誰の喉へ剃刀を當ててる時でも、シユツシユツと刄先が髯を擦つて皮膚の上を滑つてゆくのを見つめてゐると、何だか不思議な氣持がして、も少しの事でこの皮膚が切れて、凸くなつてゐる骨が切れて、眞赤な血がパツと吹き

出すんだが、何うして剃刀は何時も上ばかり滑つてやがるんだろう、ハヽア己の手は器械になつたんだ、剃刀へ附着(くつつ)いて了つたんだ、さうすると己の體全體は人の髯を剃つたり、髪を刈つたりする器械に化(な)つて了ひやがつた、忌々(いまいま)しい、己は生きてゐるぞ、生きてる證據に、一つ剃刀を外(はづ)らかしてグイとやれといふ氣持になるんだね、だがさう思ふとふと、氣が附いたやうに、生命(いのち)と掛替だぞと自分が自分の耳で獨語(ひとりごと)を云つてるんだね。

お鹿　野口さん、まア何うしてあんな事を云ひ出したんでせう。

野口　少し逆上(かみ)に附いてるやうだね、親方チト休んだら善いぢやあアないか？

爲吉　イヤ、自分の生命が惜しいツと思ふ位だからまだ大丈夫、そりやアこれでも相手に依つちやア、取替へたつて構やしないサ、何うせ己もこんな下らない商賣をして、腰の曲るまで生きてゐたつて始まらないからな、だが是迄まだ不足のない相手には出逢さない、村長や、郡長や、三等郵便局長なんかの喉笛を抉(ゑぐ)つてやつたつてつまらないからな……尤も一月前に、この村へ演習の下見物に來た何とか少佐の奴は、田舎の剃刀は切れないとかぬかしやがつて、あんまり威張くさつた口を利くから、髯が切れなくても、骨は切れるのを見せてやらうかと思つて、已(すで)にグイとやる處だつたが、つい馬鹿馬鹿しくなつて止して了つたんだ。

野口　其奴(そいつ)ア危険だつたな、でもまあ無事に濟んで村役場で騒がんでも宜かつたのは大助かりだ。

お鹿　（溜息をして）眞實(ほんと)に宅はこの頃、何うかしてるんだよ、野口さん、何卒(どうぞ)こんな事を世間へ仰しやらないで下さいよ、商賣が上りますから。

爲吉　商賣が上りやア結局幸福だ、此れで己にも又別の考へがあらア、何アに、こんな田舍にばかり日が照つてるんぢやアあるまいし、世間は廣いんだ。

お鹿　（窘（たしな）めるやうに）世間が廣くたつて、私等の生活の立つ道はもう極り切つてゐるんですよ、今更何う足搔（あが）いて見たつて、仕樣がありやしないんだからね。

野口　然う云へばまアそんなものかも知れないな。（考へ込む）

（表の戸を開けて、半白の髪と髯とに包まれた五十前後の老人、時勢遲れの、短いフロックコートに、銀鎖をジャケットの扣紐（ボトンひも）に絡（から）ませながら入つて來る、彼は小學校校長佐藤敬一である。）

佐藤校長　今日は……やア野口さんか、此れからですな？

野口　（丁寧に會釋（ゑしやく））イヤ私はその、後からでもよろしいんです……何卒（どうぞ）先生から……。

（爲吉は默禮する。）

お鹿　先生樣、ようこそ、何卒まア此方へ。

佐藤校長　（口早な調子で）難有（ありがた）う……難有う……野口さん、まア先口（せんくち）から……何卒御遠慮は要

らない事です。

野口　イヤ、私はその……何卒先生から……。

爲吉　まアお掛けなさいませ。

佐藤校長　難有う……何うだね、相不變（あひかはらず）忙しいかな。

爲吉　へエ……。（と口重たげな調子）

佐藤校長　野口さんは歡迎會や何彼（なにか）でいろいろ御用事がありませうな。

野口　ハイ……否（い）え……午後、一寸お寺まで行つて下檢分をしたら別に用事はありません……掛の方が大分居られますから。

佐藤校長　然（さ）うですかな……何しろ今日は愉快な事だね、この村の名譽でもあるし、又我が小學校の名譽だからね。

野口　然うですね、昨年は先生の二十五年勤續祝賀會がありますし、今年は又、先生の御弟子の中からアアして出世なされた方があるし、重ね重ね御目出度い事ですね。

佐藤校長　大きに然うだね、お互様に喜ばしい事だ……岡田君は相不變平民主義で、昨夜はワザワザ私の陋屋（ろうおく）を訪ねて來てくれてね、昔談（むかしばなし）も出たんだよ、今日は一つ髯でも剃つてから、御挨拶に出かけようと思ふ處だ、もう明晩は東京へ歸るのださうだから、ナカナカ忙しい事だて。

野口　何しろ中央政府の高官ですから、一日でも半日でも時間が大切なんでせう。

佐藤校長　大きに然うだらう、行く行くは大臣だらうね、矢ツ張、豪物（えらぶつ）は小學校時代から何處か

違つた處があるよ、一番か、二番か始終外(は)づした事はなかつたからな。

野口　矢ツ張、小學校時代の薫陶の如何に依りますね、佐藤先生のお手柄もあるのに相違ありません。

佐藤校長　難有う……難有う……何しろ自分の教へた生徒の中から、天下の人材が出てくれると、自分の肩身も廣くなつて來るやうに思はれるね、其處が天職の難有さだ。

爲吉　野口さん、此方(こつち)へお掛けなさい、やりませう。

野口　イヤ、先生から先へ、……私は何時でも宜い。

佐藤校長　イヤ、まア野口さんから……先口は先口だ。

野口　私は後でよろしいんですから……何卒先生から。

佐藤校長　イヤ、そりやアいけない。私は後から來たんだから。

爲吉　何方(どちら)でも、早く片附けませう。

野口　サア、先生、何卒(どうぞ)。

佐藤校長　イヤ、でも禮儀は禮儀だから。

爲吉　（剃刀を研(と)ぎながら）ぢやア野口さんから先へ息の根を留めて上げようか？

野口　串談(じようだん)云つちやアいけねえ、私は今日でなくても宜いよ、さう髪が延びてる譯でもないんだから。

爲吉　ぢやア先生から先へ片附けませう。

（佐藤校長、中央の椅子へかける。）

佐藤校長　でも爲吉君も近頃は大さう精が出るね、何しろ結構だ。

爲吉　イヤ、結構でもありませんよ、ざんぱつ屋なんて、隨分下らないもんです。

佐藤校長　イヤ、職業に高下（かうげ）はないんだから、忠實に勉强すれば宜いんだ。

野口　然うですとも、爲吉君も此迄辛抱して來たんですから、もう一息ズツと遣り通すんですね。

爲吉　（刄先を眺めながら）何を遣り通すんでせう。（高笑する）

佐藤校長　それぞれ人間には天職があるんだから、それを一生懸命に遣り通すんだね。

爲吉　二十年前に先生がそんな事を仰しやつて下さつたんだね、それからズツと遣り通したんですが、つくづく下らないといふ事が分つて來ました。

佐藤校長　フン、君が小學校を卒業後、東京へ苦學に行くつていふ話だつたのを、君の親父が心配して、父の家業を繼ぐやうに說諭してくれといふ事だつたので、私はそれに賛成したんだが、まアまア斯（か）うしてやつて行けりやア結構ぢやアないか？

爲吉　でも秀作さんには、親の家業の農業をやれつて、說諭はなさらなかつたんですね。

佐藤校長　岡田には學資金があるんだから、遊學させるといふのに賛成したよ、それが今日、秀作君の出世の基（もと）になつた譯ぢやアないか。

爲吉　ぢやア學資金がありやア、私もこんなざんぱつ屋なんかやつてるんぢやアなかつたんだね、つまり金が豪(えら)いんだハヽヽヽヽ。

野口　結局そんなもんだらう。

佐藤校長　そりやア爲吉君も小學校は善く出來たんだから惜しい物だとは思つたが、何しろ無茶苦茶に東京へ踏み出して、迷ひ途に入つちやアいけないと思つてな。

爲吉　でもその後、二三度、東京へ逃げ出しちやア、カづくで親爺に連れ戻されたりなんかしてたんですからね、それから道樂もやりました。女房も二三度取更へました、諦めようと思つても、諦められるものぢやアありませんよ。（云ひ云ひ髭剃に取かかる）

（野口は、座敷の上り框へ戻つて。）

野口　（小聲に）お鹿さん、氣を附けないといけないよ。

お鹿　眞實ですわ。（上り框へ乘り出して來て、仕事の様子を見守つてゐる）

（爲吉は折々、溜息をしてはゴリゴリ剃刀を使つてゐる。）

佐藤校長　少し暑くるしいから、頰髯は薄く剃つて貰はうか?!

爲吉　宜うございます……。
佐藤校長　段々白髪が多くなるやうだな。
爲吉　お年齡(とし)には敵(かな)ひませんね……併し先生、あんまり口をお利きになると剃刀が滑つて、何處を切るか知れたもんぢやアありませんよ。
佐藤校長　然う然う、毎度、汝(おまへ)に叱られるな、刄物が汝の手にあるんだから斯うなつちやア、汝の命令通りにする外はないね。
爲吉　もうお默んなさらんと、剃刀が使へません。
佐藤校長　ハイハイ。

（爲吉は今、喉(のど)の邊りへ剃刀を動かしてゐる。）

野口　（相不變、小聲に）何んだか冷汗が出るやうだよ、あれで指先へグイと力を入れたら、それ限(き)りだから、人間つて脆(もろ)いもんだな。
お鹿　（振返つて）聞えますよ、家(うち)のが變な氣持でも起しちやア大變ですからね。
野口　（コロリと疊へ寢轉んで）併し考へると忌(いや)になるね、立身だの、出世だの、やれ名譽だの、財産だのつて、血眼(ちまなこ)になつて騷ぎ立てて見た處で、あの指先一つでグイとやつたら、後はもう何んにも無くなるんだからね、人間つて奴の總勘定が附いて了ふんだからね、三十近くにもな

って、これから東京なんか出て苦勞するのも馬鹿かな、アヽアヽ。

お鹿　忌(いや)に心細い事を云ひ出して來たのね、野口さんは？

野口　（興奮的口調で）併し矢張り、金だ、世の中は金がなけやア駄目だ。

お鹿　つまりは其處(そこ)へ落込んで行くんだね！

野口　金があつて見給へ、あの人だつて、參事官位になれたかも知れないよ、そりやア實際分らないよ。

お鹿　さうすると私が參事官の夫人(おく)さんだね、惜しい運を取逃がしたよ。

野口　女は何(ど)んな出世でも出來るさ、女の資本は容貌(きりやう)とそれから肉體(からだ)だアね。

お鹿　然う云やア男だつて腕一つぢやアないかね？

野口　腕があつても金が無けやア當節は駄目だ、時勢が然うなつて來てるんだから何うも致方がない……オヤ、もう濟みさうだな、エヽと、私は一寸出て來よう。

お鹿　頭髪は何うなるの？

野口　後にせう……一寸用事があるから……先生御免蒙(かうむ)ります……。（スタスタと出て行く）

佐藤校長　（洗面臺から歸つて）ハヽア、大分若くなつたやうだな。

お鹿　先生は何時も御元氣が宜(よ)くいらつしやいますよ。

佐藤校長　まだナカナカ此世にする仕事が殘つてゐるからな、もつと元氣が宜くないと何うもならんのだよ……序(ついで)に香水を一つ願はうかな。

（爲吉、香水を吹き掛け了つて、座敷へ上る、お鹿はお茶を入れる。）

佐藤校長　野口さんは何うして歸つたのかな、私が先へ濟まして何うも氣の毒だつたな。

お鹿　イヤ、又お歸りになるでございませうよ。

佐藤校長　然うかな。（頰を撫で廻して）イヤ、スツカリ善い氣持になつた、髯が延び過ぎるとモシヤモシヤして他人の顔だか、自分の顔だか分らなくなるが、お庇（かげ）でサツパリした。

お鹿　まアお茶を一つ召上りませ。

佐藤校長　難有う……難有う……ぢやアここに御禮を置きますよ……左様なら。

お鹿　先生お剩（っり）錢を……。

佐藤校長　否（いや）……要りません……左様なら。

お鹿　難有うございます。（送り出して）爲さん、「難有う」位云つたら善いぢやないかね、あんまり無愛相だよ。

爲吉　（煙草を吹かしながら）難有くもねえよ……何んだい老耄（おいぼれ）めが……秀作さんが小學校時代から違つてりやア己だつて違つてらアな、己の方が卒業する時は一番だつたぞ、天職だなんて、二十五年も一つ處の小學校校長に嚙（かじ）り付いてやりやア譯は無いやね、善く倦（あ）きもしないでやつて來られたもんだ、馬鹿根氣丈（だけ）は感心するよ。

お鹿　でも二十五ケ年も辛抱が出來たから、知事さんから御褒美が出たんぢやないかね！

爲吉　ぢやア己れも今に二十五ケ年勤續のざんぱつ屋さんだつて、郡長から御褒美の出るのでも目的に働かうかな……糞でも喰へだツ。

お鹿　今更焦々したつて仕方がないぢやないかね。

爲吉　己はもうこんな生活に倦怠み切つたから、焦々するのも當前だ、第一、あの姿見鏡から癪に障るよ、あの縁の剝げたのは、親父の代からあの通りだ、そして鏡の中を見ると椅子へ掛けた人間の顔は毎日幾度でも變つて行くが、傍へ立つて白い上着を着てる奴の面は一向變つて行かない、何時も同じ男子だ、三百六十五日、同じ男子が同じ手つきをして、同じ狹い場所を往つたり來たりして、恥しげもなく同じ事を繰返してやつてゐやがる、あの鏡は玻璃張の檻だよ、その檻の中から一生出られない男子が一匹ゐるんだ、氣の毒にもなつて來るし、可哀さうにもなつて來る、而もそれが己なんだ、この己なんだ、さう思ふと堪らないッ。（頭髮を拶る）

お鹿　それがサ、今の運命だよ、もう斯うなつちやア三度のお飯が戴いて行けりやアそれで結構だとしとかなけりやならないんサ、何うしようたつて、何うしやうもありやアしないからね、氣分を取直してお稼ぎよ。

爲吉　フン、稼いだつて何うなるんだい、己が斯うして一生稼いで、汝を養つてやりやアそれで善いんかい？　それが己の一生の目的なんだらうか、馬鹿馬鹿しいッ……貴樣アそれで善くつても己は忌だッ。

お鹿　ぢやア他に何うする途があるつて云ふの？　私だつて何も、汝さんに養つて貰へばそれで善いと云ふんぢやアないよ、一生此處で燻ぶつてゐて、それで他に思ひ殘す事はないと云ふんぢやないサ。

爲吉　（冷笑）然うだらう、汝が店番をしてゐるのを見ると、御退屈樣つて折々云つてやり度いやうな氣がするよ。

お鹿　お察しが善いわ、眞實に私だつてお退屈樣に相違ないんだよ、汝さんの處へは、取替へ、引替へ、御客樣が見えるんだが、私のお客さんつて、今ぢや汝さん一人限りなんだからね。

爲吉　（怪訝さうな眼色）己は貴樣のお客さんかい？

お鹿　（笑顏）今ぢやア御亭主と定つた人が、私のお客さんぢやアないか、昔は然うぢやアなかつたよ。

爲吉　（吐出すやうな調子で）フン、だるま屋ぢやア毎晩、御亭主が變つてゐたんだからな、この頃はお客さんの顏が定り切つて了つたから、それで御退屈だと仰るんだな。

お鹿　汝さんが、今、あんな事をお云ひだつたから……鏡の中に、何時も同じ顏をした男子のゐるのが怖ろしいつて云つたもんだから、私も何だか自分の胸に思當つて來たんサ。

爲吉　何んな事を思ひ當つたんだい。

お鹿　怒つちやいけないよ、何も浮氣で云ふんぢやないが、私も汝のやうな事を折々考へてゐないんぢやアないんだよ。

爲吉　何をサ？

お鹿　（半ば笑つて）夜中なんかに、偶と目が醒めると、何時も同じ顔の男子が、私の傍に眠つてるんだもの、何んだか不思議なやうな、怖ろしいやうな氣持のする事もあつたんだよ。

（爲吉はヂツトお鹿の顔を見据ゑてゐる。）

お鹿　ホヽヽヽ何もそんな怖い顔をして見なくつても善いぢやアないか？　汝さんが忌になつたつて譯ぢやア更々ないんだよ。

爲吉　（頽然となつて）アヽヽ、人間つて奴は些とも依賴にやアならねえんだ。

お鹿　そんなに解つておくれでないよ、汝さんが鏡の話をするんだから、私だつて同じ事だ、誰にだつて皆辛抱氣がなけやア駄目だつて云ふんサ。

爲吉（少し慄へた口調で）貴樣がそんなに浮氣つぽい奴だから、伊勢屋の野良息子なんかが、ちよいちよい爪を出しに出入してやがるんだ、イヤ、あの野口だつて油斷はなりやしない、何の客も、何の客も油斷がなりやしない。それ丈でもこんな商賣は忌だ、忌だ、あの鏡を叩き壞してやらう。（駈下りる、お鹿は追駈けて肱へ取り付く）

お鹿　短氣な事をおしでないよ、商賣道具を叩き壞したら明日の日を何うするんだね、早速困るのは眼に見えてゐるぢやないか。

爲吉　放しやがれッ……幾何(いくら)困つたつて死んだらそれでお了ひだい、放しやがれッ。

お鹿　（堅く抱き緊めて）私はまだ死ぬのは忌だよ……今死ぬ程なら、もつと前に死んでるわね。

爲吉　誰と死んでるんだ？（振返つて顔を見詰る）

お鹿　誰とでも相手は構やしないサ。

爲吉　賣女(ばいた)めッ、（と頰桁(ほほげた)を叩いて、グタリとそこの椅子へ腰を落し）惚れたの腫れたのつて、貴様は皆己を欺(だま)してやがつたんだな。

お鹿　（嘲るやうに）勝手に疑るが善いよ。

爲吉　（無念さうに切齒して）こんな奴にまで馬鹿にされてたんか？　己はこんな下らない男子だつたのか……。

お鹿　何うせ汝(おまへ)も私も下らないサ。似たもの夫婦だよ、今更怒つたつて、泣いたつて、仕方があるもんか。

（爲吉は額を押へて呻吟(うめ)いてゐる。）

（突然、戸口から絹帽子(シルクハット)に、フロックコート、胸間に金時計の鎖を光らせた、代議士參事官、岡田秀作入つて來る、手にはシガーの紫烟ゆるく立上つてゐる。）

岡田　御免……今日は！　（笑顔で會釋する）

お鹿　（周章てて丁寧に叩頭をしながら）入らつしやいまし。

（爲吉立上つて呆然と見てゐる。）

岡田　（笑を浮べて）私だ、岡田だ……何うも久し振だつたね、昨夜は折角訪ねて貰つたさうだが、來客が立込んでゐて何うもとんだ失禮を……。

爲吉　（顏色を和げて）ア、岡田様でしたか？　善うこそア……。（會釋する）

お鹿　（アタフタと、座敷の方へ行つて、そこらを取片附け、極り惡さうに座蒲團を出しながら）旦那様、まア何卒此方へ……汚くろしうございますが、まア何卒……。

爲吉　何卒まア……。

岡田　（鷹揚に歩み寄つて腰を卸し）お介意なく……一寸挨拶に出かけました。

爲吉　（上着を脫ぎながら座敷へ上つて、小く正坐つて）こんな汚さくろしい處へ善うこそ入らしつて下さいました、今度は何うも御目出度うございます。（丁寧な叩頭をする）

岡田　イヤ、難有う……爲吉さんとは大分暫らく逢はないな、御健康で、稼業に御精が出て何よりだ。

爲吉　一向、詰りません……、御目に蒐るのもお恥かしい次第でございますよ。

岡田　イヤ、國民が各自各自、その職業を忠實に勉强して貰へば、それで結構だ、役人になるの

が、別に大した名譽でもないからね。（云ひ云ひシガーを燻(くゆ)らしてゐる）

爲吉　（苦笑して）何しろ貴方は結構な身分におなりなさいましたが、私はこんな事で、うだつが上りません、もうつくづく忌(いや)になつたから、廢業せうかつて、思った矢先なんです。

岡田　それは戯談(じやうだん)だらう、今更商賣替をして見たつて、別に面白い事がある譯のものでもないんだからね、まアまア辛抱が第一だね。

お鹿　全く旦那様の仰有(おつしや)る通りでございますよ。

岡田　ア、まだしみじみ御挨拶もしなかつたが、爲吉君の御家内ですな。

お鹿　ハイ……（耳の根を赤くして挨拶しながら）爲吉から御噂も聞いて居るのでございます、昔をお忘れなさらないで善うこそお出で下さいました。

岡田　爲吉君とは小學校時代の惡戯(いたづら)仲間だつたんで……矢ツ張り折々は思出すんだね。

お鹿　それにしても、善うこそ、ワザワザ御越し下さいまして恐れ入りますでございます。

岡田　イヤ、別にワザワザと云ふ譯でもないんだがね、この先の有志者の家へ廻つて、この前へ來かかるとつい顔を一つ剃つて貰はうかと思つてな。

（爲吉は眼をジロリと光らせる。）

お鹿　オヤ、左様で入らつしやいましたか、ぢやア一つお顔を……爲吉さん……。

岡田　別に急がんでも善い、午後までは用事がないんだから……今小學校の門の前を通つて見ると、黑かつた校舍は、ペンキ塗に變つてゐるが椎樹（しひのき）なんか昔のままに茂つてるな。

爲吉　（冷淡に）然うですな、昔のままの者もゐりやア、變つた者も居りまさア。

お鹿　（愛嬌笑）　ホ、、、旦那樣なんか、一番善くお變りなすつたんでございますね。

岡田　（得意げに微笑）まだまだ變り樣が足りないんだ、これから又、二度も三度も繭（まゆ）を破らないと、目的地へ飛んで行けないんだ。

お鹿　（媚（こ）びた調子で）何（いづ）れ大臣におなりなさるんでございませうね。

岡田　（聲高（こわだか）に笑ひ）ハツハツハツハツ、ナカナカお世辭が善いね、……併し大臣なんか何んでもない者だよ、蜜柑の皮を投げ付けて當つた人を大臣にしろつて、云つてる者もある位だからね。

お鹿　ヘエ……。（相返答（あひづち）に困つてゐる）

爲吉　（冷笑的口調で）蜜柑の皮ぢやアない、金だアね、金さへありやア代議士にでも、何にでもなれる、金の無い奴がざんぱつ屋なんかになるんだ。

岡田　（眞面目に）爲吉君は大さうこの稼業が厭になつたやうな口吻（くちぶり）だな。

爲吉　厭も絲瓜（へちま）もありませんよ、成らう事なら私も富豪（かねもち）の家へ產れて、もう一度學校から遣り直し度い……でも小學校に居る時分にや、富豪も貧乏人もありやアしない、强い奴が大將になる、弱い奴が草履持になる、出來る者が一番で、怠ける者がビリと極つてたんだから苦情も不平も

無かつたんだね、……椎の樹と云やア、秀作さんを踏臺にして、私がその背中へ乘つて、椎の實を取つた事もあつたつけな、月の出る晩方に……。

岡田　（追懐的に）然う然う一度、樹の洞穴から蝙蝠が澤山飛んで出て、爲吉君が吃驚して、飛び下りたので、私も膽を潰して逃げ出さうとするはずみに、樹根に轉んで大そう鼻血を出した事をよく記憶えてゐるよ、今日もその事が頭に浮んで來たのだ、何しろ無邪氣だつたね。

お鹿　オヤ、まア、そんな事があつたのでございますか？

岡田　子供の時の事を思出すと、隨分面白いな。

爲吉　（溜息して）私は苦しくなつて來る、岡田さんにはこれから前途があるが、私の眼先は眞闇だ、方角が立たない、もう手も足も縛られてるんだ。

岡田　何うしてそんな自棄を云ひ出すんだね、斯うして稼いでりやア、それで澤山ぢやアないか！

お鹿　人にはそれぞれ分相應つて云ふ事がございますからね。

岡田　大きに然うだ、女房子が養つて行けりやア、それで人間は一人前だ、何處へ行つても恥かしい事はない。

爲吉　（自ら嘲るやうに笑つて）一人前の人間つて奴にはもう倦々した、圖拔けて豪くなるか、圖拔けて馬鹿になるか、世の中の相場を狂はすやうな事をやらなけりや生き甲斐はねえ、毎日、毎日、活版で捺したやうな事を繰返してやつてるのが恥かしくないやうな奴は生きてるんぢや

アない、器械になつてるんだ、己だつて、バリカンを使つてるのか、バリカンに使はれてるのか分らなくなつて來る時がある、何しろ情ない話だ。

野口　（戸口から聲をかけて）　頭髪丈（だけ）やつて貰はうか、髯は自分で剃つて來た。

（岡田を見ると、周章（あわ）てて禮をする。）

爲吉　頭髪丈だな。

野口　イヤ、然う急がんでも。

爲吉　でも、貴方が先口だから、先へ片附けよう……（仕事着を着けて下り立つ）ぢやア一寸失禮します。

岡田　サア、何卒……。

野口　イヤ、岡田閣下から何卒……私なんか何時でも善い……意外な處で御目に懸ります。（ペコペコする）

岡田　何卒お先へ……私は別に急がないから。

爲吉　野口さんは朝から來て待つてゐたんだから先へやらう……髯を自分で剃つたたア可笑（をか）しいな、（冷笑して）誰れが汝（おまへ）さんの……。（唾を吐出すやうな口調）

お鹿　岡田の旦那様から先へしてお上げなさいよ。

岡田　イヤ、私は何うでも善いんだ、まア家内（おかみ）さんと世間話でもして待つてゐませう。

お鹿　何んならお邸へ伺はせませうか？

岡田　イヤ、イヤ、そんな事には及ばない、私も洋行中の習慣が附いて、毎朝、自分で剃つてゐたんだが、家内を貰つてからは、家内に剃らせてゐた、その剃刀（かみそり）が丸刄になつたので、磨（と）がせにやつたまま此方へ來たんだ、もう二日剃刀を當てないのでザラザラして氣持が善くないんでね！

（この間に、野口は隅の椅子へ小さくなつて倚りかかる、爲吉は剪刀（はさみ）を使ひ出す。）

お鹿　オヤ、奥さまに、（莞爾（にっこり）して）左様でございますか？

岡田　（ジロジロお鹿の顔を見て）貴方は何處かで見たやうな氣がするよ、東京に居た事があるんぢやアないかね？

お鹿　ハイ、十年許り前には居た事もございますが、旦那様に御目に懸つた事はないやうでございますよ。

岡田　東京の何處に居たんだね？

お鹿　ハイ……あの……片隅の方に……一寸（ちょっ）との間でございますから、よく覺えても居りません。

岡田　然うかなア、ぢやア、私の思違ひかる知れんな……空肖（そらに）つていふんだらうねハヽヽヽ。（ト

快活に笑ふ）

お鹿　でも東京は善うございますわ、十年の間に大そう變つたでございませうね。

岡田　そりやアもう日々變つて行くね、何を云つても日本ぢやア東京だ、自分の產れ故鄉の惡口を云ふぢやアないが、こんな田舍へ歸つて來ると、何んだか鼻を突くやうな氣がしてな。

お鹿　そりやア然うでございませうとも、私等も同じ苦勞するなら矢ツ張り東京邊へ出て一苦勞したうございますね、此處ぢやア怠屈して了ひます。

岡田　（打解けた調子で）東京へ出なさい、それが善い、私なんか一週間此處に靜（ぢつ）としてゐると、怠屈で堪らないね、親の家があるし、選擧區でもあるしするから、そんな事を云つてられない場合もあるがね。

お鹿　左樣でございませうとも……（笑靨（えくぼ）を見せて）何んなら御邸へ、御奉公にでも上げて戴きませうか知ら?!

岡田　ハヽヽヽヽそれは結構だ、貴方が獨身者だと明日でも連れて歸るんだが、然うも行かないしサ。

（爲吉は又しても二人の談話の方に耳を傾けてゐる。）

野口　アイタヽヽヽ耳を切つちや困るよ、親方しつかり賴む。

爲吉　ちよつと剪刀の尖が當つたんだ、何んでもねえや……。

（その方には眼も遣らないで、岡田は興が乘つたやうに、片膝を深く疊の上へ滑らし込む。）

お鹿　否え、私なんか何うなつたつて構はない體でございますから、眞實に御奉公口があれば、も一度東京へ出て見度いと思ひます、御戯談になさらないで旦那様に一つお世話をお願ひしませうか？

岡田　否、眞實に、家妻が兎角病身だから、仲働を一人入れたいと思つてる處だがね、心當りがあつたら御周旋をお願ひせうか、これは戯談にしないで氣にかけてゐて貰ひ度いね。

お鹿　オヤ、眞實でございますか？……奥様が御病身で入らつしやるんでございますか？

岡田　婦人病でもう一年許りぶらぶらしてゐて、病院へ出たり、入つたりなんだから、弱って了ふんだ、矢張婦人は體格が善くないといけないよ、貴方は健康さうだな。（と肉附を見てゐる）

お鹿　ハイ、貧乏するお庇で病ひもしませんが、心は弱いのでございますよ。

岡田　でもよく肥つてゐられるやうぢゃないか？

お鹿　（微笑）脂肪質肥つて云ふのださうでございます……色艶が惡うございましてね。

岡田　下地が白いんだらう……イヤ、美人に色の黑いのはあまりないやうだねハヽヽ。

お鹿　（嬌を作つて）旦那様もお人が惡うございますよ、そんな事を仰しやつて、お戯ひなさる

ものぢやアありません、若い娘ならウツカリ善い氣になつて、旦那様の後から追駈けて行くやうな事になりますよ……（低聲で）眞實に、私仲働に使つて戴けませうか？

岡田　（髯を弄つて）でも夫婦連れの御奉公はちと當方に困るよ、心當があつたら賴みます。

お鹿　心當がありますよ、（媚るやうに見て）オヤ、旦那様御襟に煙草の灰が。（云ひ云ひ膝行り寄つて胸を輕くたたく）

岡田　難有う、（仕事場を顧みながら）まだ時間が取れさうだね、午後は大分忙しくなるから、何なら貴方に一つ剃つて貰へまいか？

お鹿　お顔を……私はまだ慣れませんけれども……爲吉さんの顔しか剃つた事はないんですけれども……。

岡田　傷を付ける心配もないでせう、一つ願はうかな。

お鹿　よろしうございます……、何うせ奥様のやうには參りますまいけれども。

岡田　（笑つて）處が一年許り、その奥様が顔を剃つてくれないんだからね……此方の椅子へ掛けようか？　（とそこへ立つて行く）

（爲吉はしきりに尻目にかけながら、自棄に剪刀を鳴らしてゐる。）

お鹿　（庭へ下り立つて、白い巾を岡田の首へ巻いてやりながら）お急ぎなさる様子だから、私

が剃つて上げますよ、旦那様の御注文でもあるしね。（云ひ云ひ剃刀を研いでゐる）

爲吉　（突慳貪に）もう直濟むんだ。

岡田　御家内に御苦労をかける事にした、昔の友人に髯を剃つて貰ふのも氣が刺すからな。

（爲吉は忌な顔をして彼方へ向く。）

お鹿　旦那様は明日、東京へお立ちになるのでございますか？

岡田　明日の午後から立つ積だ、これでナカナカ用事の多い體だからな。

お鹿　左様でございませうとも、お越になつても、お歸りになつても眞實にお大抵ぢやアございませんね、今日は此から演說會に、歡迎會とかがあるんでございませう、嘸お疲れなさいませう。

岡田　何しろ、皆の衆の厚意だから疲れるも何も云つちや居られないんだね。

お鹿　新聞へ毎日、旦那様の事が出て居るのでございますね。宅と二人で引張り合で讀んで居ります。

岡田　ハヽヽいろいろお負を書き足すので困るよ、東京の新聞には又、官費で黨勢擴張に出かけたなんて惡口が叩いてあつた、下らん事を問題にするもんだ。

お鹿　お歸りになつたら、東京でも歡迎會とかがあるんでございませうね？

岡田　マサカ……ハヽヽヽヽ、今度は歡迎會でなくて、停車場で新聞屋連中の囚(とりこ)になるんだ、それは實にうるさいよ、又、尾に鰭(ひれ)を附けて、いろんな事を書立てるのだらう、殊に反對黨の新聞と來たら、思ひ切つた猛烈な捏造(ねつざう)記事を出すんだからホトホト閉口するね。

お鹿　（剃刀を當て始めて）とても奥様のやうには參りませんよ、新參者でございますから……。

岡田　結構結構……。

（お鹿は微笑して、岡田の顔へしきりに指先を觸(ふれ)て、それから又鏡をのぞいて見ては莞爾(につこり)する。）

（爲吉は小ツ酷(こつぴど)く、野口の頭髪を引掻き廻しながら、一方を尻目でチラチラ睨んでゐる。）

お鹿　旦那様のお髯は随分濃くていらいしやいますね。

（爲吉は野口を洗面臺の處へ引張つて行く。）

お鹿　お髪(ぐし)も艶々して、眞實にお羨しいやうでございますわ。

岡田　……。

（爲吉は焦々(いらいら)して野口の頭髪へ香水を吹きかける。）

お鹿　お襟足の長くていらつしやる事、女に欲しうございますわ。

岡田　……。

（野口は座敷の上り口へ戻り際に、鏡の中の岡田に默禮する。）

爲吉　（急に剃刀を研ぎ始める、眼色が變つてゐる）お鹿、退(の)くんだ、私が剃る。

お鹿　（吃驚(びつくり)した眼色で見返つて）宜(い)いんだよ、もう直だから（小聲に）加之(おまけ)に氣持宜ささうに、ウトウトしていらつしやる樣だからね。

野口　お鹿さん、剃つてお了ひよ、何うも親方は亂暴だからいけないよ、私は耳へ傷をした。

お鹿　眞實にいけないわね。何うかしてるんだから。

野口　剪刀(はさみ)だつて、危險だよ、私は冷々した。

お鹿　（輕く笑つて）野口さんは一體氣が小さいんだからね。

爲吉　（研ぎ濟ました剃刀の刄先を見つめて凄い笑を洩らし）己は剃刀を使ふんだぞ、剃刀に使はれる人間ぢやアないんだ。

お鹿　宜いよ、私が剃つて了ふんだから、もう喉(のど)だけだよ。

爲吉　退(ど)けツ。（と睨む）

お鹿　宜いてばねえ……、（小聲で）ウトウトしていらつしやるんだから。

爲吉　退けツ。（肱を摑んで向へ突き退ける）

お鹿　酷(ひど)い人……眼をお醒しなさるんだよ。

（爲吉代つて、岡田の喉を摩(さ)する。）

岡田　ア、爲吉君か、善い氣持で、ウトウト夢を見かけた處だ。

爲吉　（冷やかに）定めて御立身なすつた夢でも見ていらつしやつたんでせう。

岡田　何んでも急に電報がかかつて東京へ歸ると、何處か大きな廣間へ召し出された處だつた、壁が金色で、緋天鵞絨(ひびろうど)の帷幕(カーテン)なんか掛つてゐて、足の下には辨慶縞のやうに、黑と白との大理石が敷き詰めてあつてな……何處か外國で見た宮殿のやうだつた。

爲吉　ヘエー、私なんか夢にも見られやアしませんや……。

岡田　（獨語するやうに）そして向うの三重になつた蛇紋の大理石の一番上の臺には、ゴブラン織の絨氈(じゅうたん)を敷いて、玉座が出來てゐる、……その玉座に、金の縁縫をした紫色の長い絹の裾を曳いた女王がゐられる……その女王が可笑(をか)しいんだ。

爲吉　ヘエ……何んなに可笑しいんですかな？（と冷嘲する口調）

岡田　（笑つて）それが可笑しいんだ……それが君の御家内の顔そつくりだつた……アヽ、こんな面白い夢は近頃見た事がない、惜しい處で目を醒まされたよ。

（お鹿は、莞爾（につこり）して、鏡の中の岡田を見る。）

爲吉　ヘエ……その女王があの嬶（かかあ）の面（つら）に見えたんですか？　コリア笑はせ物だ。（云ひ云ひ剃刀を當て始める）

お鹿　汝さん、氣を附けてお剃りよ、大切な方だからね。

爲吉　（振向いて）何が大切なんだい、素面女（すべた）ツ。

お鹿　旦那は大切なお體だと云ふんだよ、野口さんのやうに、粗末な眞似をおしでないと云ふんだよ。

爲吉　やかましいツ……喋舌（しやべ）るなツ。（云ひ云ひふと鏡の中を見て）やつてやがる、相不變あの男が檻の中で働いてやがる、白い衣服（きもの）を着た囚徒だな、彼奴（あいつ）は……。（と見入つてゐる）

岡田　君何を云つてるんだね？

爲吉　イヤ、鏡に映つてる自分の影法師を見ると、つくづく情なくなつて來やがると云ふ事サ。

岡田　何うしたと云ふんだね。

爲吉　秀作さんは夢を見てられるんだ、人の嬶に紫の衣服とやらを着せて贅澤な眞似をする夢を

見てられるんだ、その傍に己は立つて、一生アアして人の髯を剃つたり、頭髪の臭氣を嗅いだりして暮さなけやならない、堪らない、堪らないッ。

岡田　少し逆上せてゐるやうだね。

爲吉　今こそ、二人の影法師がアアして鏡へ映つてるが、秀作さんが立つて了つたら、後には己一人になる、己一人が何時迄もこの檻の中で過さなけやならない、忌だいッ。

お鹿　（歩み寄つて）汝、又何を云ひ出したんだね、仕事を早くサツサツと片附けたら善いぢやないかね、旦那様もお忙しいんだから。

爲吉　賣女めッ、その旦那様に蹤いて行き度いつて、云つてやがつたな。

お鹿　（苦笑）戯談を眞に受けるものがあるかね、お坊ちやんねえ、汝も……。

岡田　早く片附けてくれちやア何うだ？

爲吉　（興奮した口調）片附けるとも……己は斯うして剃刀を片手に握つてる……此の手で首を押へてゐるんだ、斯うしてる時や、此の世界に誰も恐ろしい者はない、……馬鹿め、己はまだ生きてるんだぞ、今日こそ剃刀を使つてやるんだ……。

（剃刀が急に閃く、岡田は一叫して椅子と共に倒れる。）

お鹿　アツ……汝さんまア何うしたんだね。（と叫ぶ）

野口　たうとう遣附(やっつ)けたんだ、（慄へた口調で）演說會も歡迎會もこれで滅茶滅茶だ。

爲吉　（瞳を据ゑて）オヤ、オヤ、己の眼前に己の死骸が倒れてやがらア……（狂的な笑）ざまア見やがれ。

（青白く慄へて立つ。）

――カーテン――

（大正三年八月「中央公論」

底本　現代日本文学全集　第92（現代戯曲集）
出版者　筑摩書房
出版年月日　1958